

生活の荷車を曳け

生活者としての教師の詩

深沢義旻



新評論版

生活の荷車を曳け

生活者としての教師の詩

深沢義旻

著者紹介

ふかざわよしあき

深沢義旻

1930年 静岡県に生まれる

現在 千葉県松戸市立松飛台小学校教諭

現住所 千葉県柏市松ヶ崎365

主 著 『父母集団と学級づくり』明治図書

『児童詩誕生』明治図書

生活の荷車を曳け——生活者としての教師の詩——

1971年8月20日 初版第1刷発行

定価 900 円

著 者 深 沢 義 旻

発 行 者 美 作 太 郎

発 行 所 株式 会社 新 評 論

東京都新宿区戸塚2-1053-14 電話 東京 (202) 7391

(〒 160) 振替 東京 113487番

落丁・乱丁本はお取替えします

印刷所 白陽舎印刷工業KK

製本所 河 上 製 本 所

<検印廃止>

© 深沢義旻 1971年

0095-950002-3177

冷めた恍惚

——はしがきに代えて——

真壁 仁

一九六六年のことだったと思う。松戸市に「片隅の詩」という、詩を書く主婦のサークルがあり、招かれてその集まりに出かけて行ったことがある。矢切小学校に当時つとめていた深沢君が指導してできたサークルで、詩を書いてもう三年にもなっていた。

そのときはじめて僕は深沢君と会った。主婦のサークルは、この先生を心から信頼しているようだった。それは、合評会に学校を貸してくれたり、雑誌の編集やら印刷やらを引きうけてくれるからだけではなかったようである。この先生自身が詩を書き、詩を書く人の目のきびしさと温かさで、書くことの意味や書くことのたのしさを語ってくれていたからのようであった。僕はすすめられるままに、松戸市の松ヶ崎にある彼の家に行つて泊めてもらった。そこでまた、ひと晩話しあうことができた。

何よりも深沢君は、本務である教師の仕事にうちこんでいた。それは、子どもたちの書いた作文や詩や、子どもたちの彫った版画作品を見せてもらっただけでもわかる気がした。

彼は、学級の子どもたちに毎日生活ノートを書かせていた。それを読み、すぐ赤ペンで感想を書き、批判や答えを書いていた。それは素早い反応のしかたであり、深い対話のしかたであると思った。

深沢君は宿題をいっさい出していない。必要以外のテストをやらない。そんな形だけのことで、子どもが、心とからだを前のめりにして話しかけてくる方法をとっていた。どうしても考え、どうしても相談し、どうしても動いてみなければわからないように、子どもを駆りたてていた。

そうであるから、教師である深沢君は忙しくならないわけにはいかない。多忙の中に自ら追いやっていたのである。子どもと教師のあいだに、火花を散らす葛藤がおこっていく。子どもが変わっていく。教師が変わっていく……

深沢君の話では、睡眠の時間が、毎日あまりないようであった。仕事と勉強を拡大していけば、眠る時間を削る以外、一日を終わらせることはできなくなっていたのである。

深沢君は、矢切小で、学級文集「葦笛」を出していた。それは主として子どもの詩をのせていく雑誌であったが、ほかに社会科の授業から生まれた子どもの文章をいろいろな形でまとめ、

次々に刊行している。「深沢学級の社会科」「葦笛の子ども達が綴る日本歴史物語」などというのが、今、僕の手許にも残っている。詩や文章を書かせることを、教育の一つの大切な方法とする戦前戦後の伝統を、彼は理論的にも実践的にも深めようと努めていた。

「ものをかくことへの抵抗は／自分をさらけ出さなければならぬところからくる／ものをかくことのくるしさは／自分をごまかすことのできないところからくる／ものをかくことのつらさは／自分の思考をまとめることの未熟さを／思い知らされるところからくる」

これは、「鉄筆のうた」のはじめの数行である。子どもと教師が書き手となることの意味を、裏側から語っている。それは、自分の中の虚妄を剥ぎとり、欺瞞をえぐりだす作業であり、認識を定着させる方法であることを示している。

詩や文章を書かせること、版画を彫らせることから、子どもたちがどんなに変わっていったか。それを明らかにすることが、深沢義曼の教育のすべてを語ることになるにちがいない。そのためには、大変たくさん作品がのこされている。

僕は、深沢君が矢切小に赴任してから、一年半たった一九六五年九月の「共同作品」の中に、次のような文章を見出す。はじめて先生を教室に迎えた子どもたちの観察と感想である。

（友だちが「ほらあの先生だよ」と言った。ぼくはその単車に乗っている人を見て、ギョツとした。その先生は、白い鉄かぶとをかぶって、ほこりよけの目がねをはめて、皮ジ

ヤンパーを着て、皮のズボンをはいて、とにかく武装したオートバイ部隊の兵たいのように見えた。こんなふくそうしてくる先生を初めてみた。

教室であつてみると、おでこが広く、つやつやしていて、目玉がギョロッとしていて、おながが少し出でいて、あんがい背の高い方だ。歩くときはいつも胸をはって歩いている。

……先生が一番先に話したことは、「先生のおくさんも先生をしている。先生の子も君たちと同じ五年生だ。先生はともぎょうぎが悪くて、机にすわったり、道ばたでたちしょんべんしたり、言葉も悪い。だけどなるべくなおそうと努力するつもりだ。それから先生は、働かないなまけものはきらいだ。働けばすきになってやる」

とみんなを笑わせながら言った。ぼくは、ずいぶん変な先生だな、まるっきり考えが合わないや、でも、こんな先生初めてだから、おもしろいな、と思った。

……先生はだれかがおかしいことを言うと、大きな口をあけて、上を向いて、顔をまっかにして笑う。こんなにぼくらといっしょに笑いあう先生は初めてだ。

でも先生はおこるとものすごい。全力で大きな声をだして、いかりをぶちまける。その声は教室にひびきわたり、教室の戸があいていると、廊下にこだまする。

子どもはこのように見る力をもっている。それを表わす力も、一年半のあいだにたくましく育っている。人間の描写ができるようになっていく。深沢君は、完全に見られるものの立場に

身を置いているのだ。何も隠そうとしていない。子どもたちには、先生のしゃべったことを記録する力ものびていった。ある子どもは、深沢先生に会って二日目の授業のときの様子を描きながら、その描写の中に、先生のことばをとらえている。

「もつとらしくしな」

「もつとらしくしていいんだよ。どうせ聞くんだから。なにも、そんなにかたくならなくても、もつと楽にした方が聞きやすいだろう」

「少しでもわからないところであら、なんでもいい、すぐきくのだよ。君たちは、知らないから、わからないから学校にくるのだろ」

「できるじゃないか。だったらなぜ手をあげない。はずかしがらないでどんどん発表するんだ。それができないのはいくじなした。自分から発表するということはすごいじなことなんだ。まちがったって、失敗したっておれはしからない」

「人間のねうちは通知票ではきまらない。人間のねうちは、人間としてりっぱかどうかで決まるんだよ」

こうして書きうつしてみると、子どもがみごとに深沢先生の肖像と言動を描きだしているのに気づくのである。

深沢君は一九六七年四月、松戸市の常盤平第三小学校に転任した。そこで、四月五日から毎

日、学級通信「いしづみ」を発行しはじめた。はじめ「学級物語」と題したザラ紙一枚のガリ版通信は、翌年の三月二三日まで二五一号を数えるにいたった。これは抄録されて『父母集団と学級づくり』という題で出版されたから、その内容はひろく知られている筈である。

僕は、毎日休みなく鉄筆を握って一枚文集を刷りあげ、翌日子どもにわたすという仕事をはじめたとき、そんな大変なことをいつまで続けられるのかと危ぶんだ。しかし深沢君はそれを一年にわたって休まなかったのだ。自らを、重い拘束でしぼりつけながら、その拘束を行動のパネとして事をなしとげる、創造者の多力さを僕はそこに見るような気がした。

その精力のたくましさ、体あたりの実践は、部厚い量の通信の束を生んだだけではなかった。深沢君の教師としての思想は、矢切小の三年と、常盤平三小での実践を通して深められたとみていいだろう。こんどの詩文集に収められた詩篇も、大部分はこの繁忙の中で生みなされたものなのだ。

「片隅の詩」サークルの育成は、そうした教師活動と平行しておこなわれていたのである。常盤平へ移ってから、早速、母親文集「かざぐるま」を作り出している。

こんどの本は、これまで書いた詩をちりばめながらまとめた自伝風の人間記録であり、教育記録である。

僕ははじめて、深沢君の生い立ちと、育った境遇の実際を知ることができた。幼くて魂にき

さんだ悲しみの刻印と、長じて体験した戦争の傷痕とが、深沢君の内部にかたちづくった精神史を、はじめて読むことができたわけである。

あれほど頑丈でたくましく、またあれほど原則的で、条理を通す男と見える深沢君は、実はいたみやすい繊細な感覚と、涙もろく慟哭する情感の持主であることを、つまりは、人間らしさにおいて、この上もなく人間らしい存在であることを、この本は語ってくれている。

深沢君のつよさは、自分の弱点と欠陥を自知して、それをかくさず、それをあばきながら越えようとしてきた生き方にある。それを描き出そうとしたこの本は、きわめて即自的な自己の記録のようであり、実は現代というものをさけがたい必然として生きた人間の人間論になっていると思うのである。

深沢義旻の詩を、上手な詩だなどと僕はいわない。けれども、授業中に、子どもに語り、子どもに聞きながら、ふつふつとして噴きでてきた詩なのである。深夜鉄筆を握りながら、子どもの父親母親にたよりの書くとうとして、湧きおこってくることばとしての詩である。詩がそのような内部衝動にもとづくかぎり、真実のひびきを持たない筈はない。深沢君は、自分を溺らすぐらいゆたかな想念とことばの噴泉に身をひたしている。その冷めた恍惚をねたましいときえ思うのだ。

目

次

冷めた恍惚

はしがきに代えて

真壁 仁

第一部 稲の花

仙あんちゃん

三

養父

九

日付

元

代用教員

二五

青春終了

三

妻におくるうた

元

父と娘

咒

ぼくらは準備をしておこう

五

第二部 黒板にうたを刻め

節ちゃん

三

医学書

五

人間のうた 充

学級憲法 壺

泣き虫が好きだ 亼

それが愛なのだよ 全

いさむに 允

家庭訪問 奕

誕生日おめでとう 二〇三

誕生日のための歌をうたおう 二〇六

鉄筆のうた 二〇

赤ペンをもて 二三

ペンだこのうた 二二三

第三部 生活の荷車

なかまたちへの手紙 三三

路の臺 二三

うたうべきだ 二三

内灘の浜辺に 二三

三里塚の夜 二四

三里塚の土 二六

彼 二六

深さんのうた 二四

掲示板 二五

北陸行 二五

ふたりの友よ 二六

石を叩き割る根の音を聞こう 二六

無色の赤旗 二七

山脈を越えて 二七

戦列の中へ 二九

レールのうたがひびいてくる 一八二

さよならと言わないで 一八四

会合の約 一八七

第四部 このいのち美しからずとも

風花の舞い狂う道 一九三

酔わずにものは言うべし 一九九

嘆くをやめよ 二〇三

連乗の潮 二〇六

悲しみを怒りに 二二三

この教師を育て詩を創らせたもの 中野光 二二七

あとがき 二五二

第一部 稲の花

太陽が灼きつく日があってもいい
土が凍りつく日があってもいい
吹き荒れる風の日があってもいい
土砂降りの雨の日があってもいい
稲の花はひらくときにはひらく

